本事業の概要および意義

（お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター教授 無藤隆）

◇専門家へのヒアリング

・具体的に 6 月以降どういう風に進めてきたかだが、スタートとして、特に青年海外協力隊の現役、OB の方々、また幼い難民を考える会その他の NGO のような方々に、いわゆるヒアリングを重ねてきた。

◇幼児教育ハンドブック

・その一方で、日本の幼児教育について、持っている専門知識をコンパクトに資料として整理した。特に今年度は、日本の幼児教育の成果を、もし途上国に持っていくとしたら、どういった形になるであろうかといったことが作業の中心になる。まだ完成版ではないが、一応案として製作した。

・作成法としては、一つは、データーベースを構築しようということで、様々な幼児教育の実践を日本中から収集した。主として、幼稚園等のいわゆる指定研究の報告書、科学研究費の報告書等を集めた。それに簡単な要約をつけてデーターベース化していくというような作業で、まだ完了していないが、年度内にひととおり終えたいと思っている。

・本来は、それを受けた後で翌年に資料をまとめる、ということになるが、やはり 6 月からの短い期間の一応のまとめをしたいということで、並行して幼児教育ハンドブックの製作を、無藤が中心になって行なってきた。

◇海外視察

・やはり現地の事情を知る必要があるだろうということで、マレーシアやカンボジアを視察し、色々調べた。

◇ねらいと今後の課題

・日本の幼児教育の成果は、いろいろな意味で、日本の事情を踏まえてあるので、そのまま発展途上国へ持って行っても、幼児教育の普及段階では通用しないだろう。また、多くのいわゆる途上国では、幼児教育の保育者養成システムがしっかりしていないので、養成段階のテキストも必要ですけれども、基盤がうまくできていない。

・さらに、広島大学のセンターや、NGO その他の方々からもかなり明確に指摘されたが、日本の成果をそのまま出したら、一種の文化の輸出、途上国にとっては文化侵略、という感じにもなる。日本の特殊な文化事情も見ると、そのまま出すのは不適当。したがって、途上国の事情も十分踏まえた上で、日本の成果を出したい。

・その一方で、日本の幼児教育の成果は、やはり世界的に見たときにかなり高いレベルにあるだろう。特に日本の実践レベルの成果というのは、高いだろう。それを何とか整理すると、役立つのではないか。そのあたりで、途上国で幼稚園を運営されたり、

あるいは教師養成に携わっている先生方からも、励ましの言葉をいただいてきた。したがって、最終的に、当初の予定ではもう少し簡単な報告書、あるいは資料集のようなものを想定していたが、途中から予定を変更して、実際に使ってもらえるものにしようということになった。

・その一方で、海外視察の結果、我々が非常に難しいと感じたことは、途上国と言っても様々な経済水準があり、さまざまな文化的な伝統を持っているのに、それらに対して、一律のものを提供していいのか、あるいはできるのか、という問題。今日本との関係も深く、お茶大の人間としてもなんとなく土地勘があるという意味で、東南アジアを中心とした国を選んでいるが、これがもう少し広がってイスラム圏であるとか、アフリカのいくつかの国々となると、相当難しい事情がある。

・また、同じように教育面での途上国支援といっても、理科教育や情報教育だと、かなり教材の輸出というような形で、色々な国で使える形を持っていると思うが、幼児教育は日本でも地域・幼稚園ごとの特徴があるように、非常に土地に根ざしたもの・文化を受け継いだものである。そういう意味では、そのような幼児教育の独自の特質といったものを大事にしながら、途上国を支援するといったことはどういうことなのか、を考えながら、半年間手探りでやってきた。今年度はハンドブックやデーターベース等を作って、とりあえず来年度どこかの国では使っていただくというところを目指したい。

・また、ハンドブックはかなり写真を入れているが、字が多い。様々な映像資料は日本でも作られているが、それをそのまま見せても適当ではないだろう。そうなると、新しく映像資料も作らざるを得ないのではないか、というような課題も新しく生まれている。